東郷村報

第125号
昭和43年9月5日
発行所
宮崎県東臼杵郡
東郷村役場

牧水祭記念号

ありし日の若山牧水先生

牧水祭にあたりて

牧水顕彰会長　小野弘

昨年の十一月三日は東郷村として誠に感激の深い日でありました。多年に亘って念願しつづけた記念館が全国的な支援の下に竣工し花々しい開館の式典を挙ぐることの出来た日であります。当日は県の内外から数百の人々が参集していただき盛大な祝福を受けられたのでありますが、先日なくなられた若山喜志子夫人も喜びの声をテープに托されて「これで牧水の魂が永遠に宿る家が出来た」と感謝の言葉を述べられました。

記念館が開館して以来今日まで約五千人の方が見学の為草深い田舎に足を運ばれていますが、私達は今更牧水先生の偉大さを痛感せずにはいられません。同時に今後の運営管理に大きな責任を感ずるものであります。

昭和二十六年九月、生家並びに遺品遺墨の保存と記念館の建設に牧水顕彰会を結成して以来拾数年の歳月が流れたのでありますが、今日の成果をみ誠に感慨無量なるを禁じ得ません。私達が顕彰会を結成してこれ等の事業につとむる所以は先生の一生を通じて産みだされた芸術を永久に保存しこれを後世に伝えると共に、その芸術を通じて多くの人々が人と生まれた喜びを感じ、共々に明るく豊かなそして文化的な社会生活が建設される様祈念しているに外ありません。

今年は先生が亡くなられて四十年になりますので中央から著名の講師を招聘し更に先生ゆかりのある人々の作品を展示し、尚県内一流の芸能人の来場を得てこの年にふさわしい行事としたいと念願しています。

不肖私は村長の故を以て再度顕彰会長の重責を担ふことになりました、勿論足らざる処は多々ありますが、この事業の使命を充分認識して最善を尽したいと存じます、この上とも皆様方の御支援を御願いする次第であります。

牧水とその歌碑

牧水の歌碑は現在全国で四十六を数えている、そのうち八つが次のように県内にある。

坪谷　昭和二十二年十一月建

「ふるさとの尾鈴の山のかなしさよ秋も霞のたなびきており」

生家の裏の岡をちょっと登ったところの巨石に刻されている。この巨石は大正の初め父親の病気で帰っていた牧水は、毎日のようにここに来てはこの石の上に登って真正面に見る尾鈴連峰をじっと眺めながら、家に留まって就職すべきか、上京して歌道に精進すべきかに思い悩んだとき瞑想にふけったり、寝ころんで本をよんだりした巨岩である。

牧水の歌ノートには初めは「ふるさとの夕日の山の――」と記してある。

細島の御鉾ガ浦　昭和三十六年七月建

「ふるさとのお秀が墓に草枯れむ海にむかえるかの岡の上に」

細島は牧水が早稲田大学時代上京する時もこの港から神戸まで船に乗り、帰郷の時も神戸からここまで船を利用したが、その頃細島に「日高ひで」という目白の女子大学生がいた。非常な才媛で、東京で牧水と親しかった。彼女は牧水が「幾山河」を作った明治四十年の秋、病気で帰郷途中大阪で死亡した。その日高ひでを歌ったものである。彼女の墓は細島港を見おろす米の山の山腹にある。

美々津の権現崎　昭和三十八年九月建

「海よかげれ水平線の黝（くろ）みより雲よ出で来て海わたれかし」

美々津は牧水が少年時代から縁故の深い地、山村育ちの牧水が生まれてはじめて海というものを見て感激したのもここである。ここには小野葉桜という歌の上ま親しい友の家もあり、明治四十五年から翌大正二年まで父の病気で帰郷し進退に迷って苦悩していた時代にも牧水は数回ここに遊んでおり、歌集「みなかみ」にはここで作った歌がたくさん収められている、歌碑の歌もその一首である。

延岡市城山公園　昭和十年三月建

「なつかしき城山の鐘鳴り出でぬ幼なかりし日ききし如くに」

延岡は牧水が高等小学校中学校時代を過ごした最も縁故の深いところ、その城山の頂上で古くから鐘楼があって、時報の鐘を鳴している。昭和二年七月、朝鮮旅行の帰りに延岡によりその鐘をきき、なつかしさにたえずこの歌を作った。

延岡市延岡高校　昭和三十二年九月建

「うす紅に葉はいちはやく萌えいでて咲かむとすなり山ざくら花」

牧水は延岡中学校第一回の卒業生である。それだけに牧水を敬慕すること深く。牧水三十回忌に建てたものである。

高千穂　昭和三十八年四月建

「幾山河こえさりゆかば寂しさのはてなむ国ぞけふも旅ゆく」

高千穂は牧水が修学旅行でここを通り歌を作ったこともある地。

都農町　国鉄都農駅前　昭和三十六年七月

「ふるさとの尾鈴の山のかなしさよ秋も霞のたなびきてをり」

都農町には牧水の一番上の姉が河野家にとついでいたため、牧水はしばしば遊びに行っているし、早稲田時代帰省したときなどよく遊びに行っている。河野家から相当学資の援助も受けている牧水にとっては縁故の深いところ。

都井岬　昭和二十三年九月建

「日向の国都井の岬の青潮に入りゆく端（はな）にひとり海見る」

歌は牧水が明治四十年夏帰省したとき、この岬の入口の都井村に出かせきのような形で来ていた父を訪ねたときの作である。

若山喜志子夫人

わが国女流歌人として名の高い若山喜志子女史が八月十九日に逝去された。

法名（香文院信誉喜志大師）

女史は明治二十一年五月、長野県松本市在広丘村に生まれ、小学校補習科のころから窪田空穂歌集「まひる野」や藤村詩集を愛読し詩歌にあこがれた。

明治四十三年女史は広丘小学校の裁縫教師をしていたが「アララギ」歌人島木赤彦が校長であった。校長赤彦からしきりに「アララギ」の同人になるようすすめられたが気がすすまず、むしろ牧水の「創作」に心を打たれていた。

四十四年に文学で身を立てようと思い上京して太田水穂方に同居し、やがて牧水と知り会って四十五年五月結婚、以後牧水のため忍苦の生活に耐えて、四人の子の母として過すかたわら作歌に努めた。

大正四年処女歌集「無果花」が刊行され、同六年には牧水との合著「白梅集」が刊行された。この頃から次第に歌壇にその地歩を確立した。

昭和二年五月牧水とともに朝鮮各地を旅行したあと七月車で坪谷に帰って病床の母を見舞った

昭和三年牧水没後はその遺業である「創作」を主宰し、幾多の困難とたたかって作歌を続けた。

同五年歌集「筑摩野」を刊行し歌壇に重きをなすに至った。

終戦後「創作」の発行経営からは手を引いたが、依然「創作」を代表する歌人として歌壇に重きをなした。

昭和二十六年歌集「寒ぶき柳」を刊行、同三十六年第五歌集「眺望」を刊行した。

昭和四十二年牧水記念館建設を記念して牧水の選集「虹は彼方に」が刊行された。これは女史の選によるものである。その序文の一節に「私の心境に映じる故人の全貌は、現在に及んでも尚遠く彼方に茫莫と顕ち現われている虹でしかないので、それを象徴するの意味でこの「虹は彼方に」と敢えて題名としたのであった」と牧水に対する深い追慕が読みとられる。

女史は昭和五年、二十七年、三十八年に本県にこられた。その際各地で

昭和二十七年の牧水祭の際はわざわざ坪谷を訪ずれ生家に数日泊り坪谷の山川にしたり牧水の追憶にふけった。村婦協の人達とも歓談し、記念の写真をとり小学校長の求めに応じて揮毫もされた。

赤い入日赤い入日とさりげなく背の子ゆすぶりかへる草原

すきとおる清水の池に育ちつゝ鯉はいよいよむらさきに見ゆ

あたらしきいのちおしむとすずめらは散る花びらを食いもちはこぶ

などの歌が校長室に今も掲げられてある。

歌集から数首をひろってみると

汝がつまは家にはおくな旅にあればいのち光るとひとの言えども

ふるさとの信濃を遠み秋草の竜胆の花は摘むによしなし

みちのべの一葉の草もふれがたき毒草なれや真夏の光

夕されば目まりて酒を煮ることのたのしきわが家早く戸をさす

遠空にくれ残りつつ一ところ匂ふ翳曳くは妙高の峯

うまきもの食べ軽き物着て温かきなさけに生くる老のしあわせ

越路には深雪のかげに紅椿咲くててふわれはおとめなりけり

家出してかへる本意なさ面はゆさ木にも水にも鳥啼いてをり

墨絵なす枝にまばらの梅の花しかも一重にて紅ぞ濃き

夜々の暗きに出でてあされども目もささびの瞳はやさしかるべし

ひたすらに行けよ行けよとゆく水のをしふるものを行かざらめやも

海の面に流れかがよふ夕日かげ楢櫚の幹に照りかへりつつ

しかずかに日向の国よ海を出でてまともの朝日低きより射す

写真＝前列かけている婦人向かって左から二人目

海の面に流れかがよふ夕日かげ楢櫚の幹に照りかへりつつ（青島）

しかすがに日向の国よ海を出でてまともの朝日低より射す（延岡）

君がみたま鎮まりいます古里の尾鈴の山の峰とがり見ゆ（宮崎）

大淀川のながれの面にうく鴨のしづ心なく羽ばたくあはれ（宮崎）

などの歌がある。

牧水祭

今年は牧水先生の四十四忌に当りますので、早稲田大学教授窪田博士の記念講演や秋月伊津子女史のお琴の弾奏などありますので皆さんお揃いお出で下さい。

お昼から坪谷中体育館でいたします。なお当日は記念館の入場は無料です。

牧水の一生

牧水は明治十八年八月二十四日に生まれた。「おもいでの記」には陰暦ではお盆の十六日に当っていたそうだとある。後ろの山続きになっている東の丘の上からすが〜しい夏の朝日が板縁に流れて来はじめた頃であった。

当時、父立蔵は四十一才母マキは三十八才であった。そして牧水にはスエ、トモ、シヅの三人の姉があり、上の二人はもう十八と十六だったが、彼女たちはその愛読していた「東京絵入新聞」の続き物築一叟編「朧影墨絵筑波根」の女主人公の名から思いついて可愛い弟に繁という名をつけた。（親は「玄虎」と命名するはずであった）何しろ初めての男の子のこととて牧水は随分可愛がられて大切に育てられた。

ところが牧水の五才の年に父立蔵は一家を挙げて隣村西郷村田代の小川という戸数百戸ばかりの部落に移って行った。坪谷よりもっと深い山奥だが、そこにはずっと以前から若山医院の出張所が設けられていて立蔵は時々そこに出かけていたのである。牧水はそこで八才の春を迎え小学校に入学したが、学校は一里近くも離れていて子供の通学には不便だったので、牧水は殆んど登校しなかった。そして二番目の姉トモの主人今西吉郎が校長をしている東郷村羽坂尋常小学校に転校し、山陰の叔父純曾の家から通学することになったが、それもしばらくで田代の家に引取られ、その秋、一家と共に坪谷に引き揚げ坪谷尋常小学校に入学した。当時の坪谷小学校は小さなもので同級生も男女合せて二十人ぐらい、その中で牧水は成績優秀な模範児童であった。「おもいでの記」には寺の住職であった叔父のことを記し（これは母マキの異母妹の主人昌福寺の金田大珍という人）その叔父の持って来る新聞に載っていた村井弦斎の「朝日桜」を読んだのが生まれて初めての小説だったことを記してあるが、「朝日桜」は日清戦争中の明治二十八年一月二日から「報知新聞」に連載されているから、牧水十一才の時だったわけである。

明治二十九年三月坪谷尋常小学校を卒業したが当時附近にはどこにも高等小学校がなかったので、父母の膝下を離れ十里ばかり距った延岡に出て延岡高等小学校に入学した。そして土地随一の文章家として知られた受持の教師日吉昇に愛され、二年頃から村井弦斎の「小猫」や「桜の御所」などの小説に読み耽るようになった。

明治三十二年春、高等小学校三年を修業した年に初めて延岡に県立中学が設立されたので入学試験を受けて及第、延岡中学生となったが、二年頃から盛んに文学書に親しむようになり、三年生になってから散文を書いたり、歌や俳句を作って校友会雑誌に出したり、また「中学文壇」その他の雑誌に投書をはじめ、三十五年には級友たちと「曙会」を起こして「曙」という回覧文学雑誌を出し、当時宮崎から出ていた「日州独立新聞」に盛んに投書を初め、翌年からはまた「野虹」という回覧の短歌雑誌を出したりしはじめた。中学時代の牧水は「桂露」「雨山」「白雨」「野百合」という雅号を順次に用いたが、三十七年の秋ごろから「牧水」を使いはじめた。母親の名マキと水と当時最も愛していたもの二つを取ったのである。

明治三十七年春、二十才で延岡中学校を卒業、四月上京して早稲田大学文学高等予科に入学し、まもなく尾上紫舟を訪ねて師事、やがて紫舟を中心に正富汪洋前田夕暮等と車前草社を結び、主として雑誌「新声」にその作品を発表するようになった。その頃牧水は将来は小説家として立とうと考え、しきりに短編小説など書いていたが、ちょうど文壇は自然主義の抬頭期だったのでいちはやくその影響を受け、そのため歌も現実を直写する清新な詠風に変り、それが次第に歌壇の注目を受けるようになって来た。

処女歌集「海の声」の出版されたのは二十四才の明治四十一年七月、早稲田大学英文科卒業とほとんど同時であった。

「幾実河」「白鳥は」その他初期の有名な歌の多くを収めているが、妙な事情で途中から自費出版となり宣伝など出来なかったため、一般からほとんど認められず、明治四十三年一月に出た第二歌集「独り歌へる」もさらにみじめな状態で出版されたため問題にならなかった。

ところが、その直後の四十三年四月、東雲堂から出版された「別離」によって一躍歌壇の花形となり、同じ紫舟門下の前田夕暮と共に与謝野鉄幹、同晶子夫妻の新詩社の歌風が衰えかけていた歌壇に新しく牧水、夕暮時代を画するに至った。

こうして牧水は最初から歌人として出発した。もちろん歌を作ることだけで生活をして行くことは不可能なので、四十二年七月には中央新聞社社会部に入ったが年末には退社、また四十四年十二月には、やまと新聞社社会部記者となってみたが、これも二ケ月足らずでやめ、その後はどこにも就職することなく、その一生をほとんど歌のために捧ぐつくしたのであった。

早稲田在学中の牧水は明治三十八年、三十九年、四十年と暑中休暇には、たいてい帰省しており、卒業した年も九月に一度ちょっと帰っているが、それからしばらくは帰る機会がなかった。

牧水が太田喜志子と結婚したのは明治四十五年五月だが、その年の七月下旬には、父危篤の電報に接してあわただしく帰省した。父の病気はしばらく小康を保っていたが、十一月十四日行年六十八で遂に長逝した。牧水は七月の帰郷以来近親たちから郷里にとどまって就職することを勧められていたが、父の死後はさらに強くそれを求められて退進に迷い、翌大正二年五月遂に意を決して出郷するまでひどく苦悶懊悩していた。第六歌集「みなかみ」所載の破調の歌はその頃の作である。

その後の牧水は常に歌壇の第一線にあって活躍していたけれども、詩人の常としてその実生活は甚だ恵まれず、非常な母親思いであったので、これには閉口しきりながら故郷の家に貧しい生活をしている母親に僅かのお小遣を送る余裕さえない始末だったが、大正九年あわただしい東京の生活を切りあげて静岡県沼津に移ってからは日々の生活がいくらか落ちついて来たし、またその担当する全国諸新聞雑誌の選歌が次第にふえて来たため、収入もいくらか多くなって来たので、大正十年頃からは何とかして母親を沼津に引取って一緒に暮そうと考えるようになり、屢々その相談をしたが、年老いても気丈な母親はなか〜それに応じようとしなかった。

かれこれするうちに大正十三年になった牧水は亡父十三回忌の法要を営むために十三才になる長男族人をつれて沼津を発った。他に用事もあったので福岡、長崎、熊本、鹿児島の諸県下を廻って、坪谷の家に帰りついたのは三月二十七日の夕方であった。父の病気のために帰省しその死後上京したのが大正二年であったから、実に満十一年ぶりの帰郷であった。古来、偉人は多くその故郷に容れられないという。牧水にも多少そうした傾向がないではなく、最初のうち牧水は遠く離れていても常に村人たちの冷たい眼を感じていたが、この頃はもう牧水の名もようやくに故郷の人たちに認められて来ていたのである。三月三十一日付の喜志子夫人宛の手紙の中に、

「驚いたのは小生の帰ったことが村中の騒ぎとなったことで、日に幾人となく人たちが押かけて来るので、来れば即ち酒で、これには閉口しきってゐる。

この四月三日には東郷村（坪谷村のほかに大字が三つある）全体としての歓迎会が開かれるそうだ。何だか滑稽にさえ考へられる次第だが、御無理御尤もで服従するほかない有様だ。」

と記されているが、その村人たちの歓迎会は予定通り四月三日夜、村内の船山旅館という小さな旅人宿で開かれた。初め発起人たちが相談に来た時、牧水はその厚意を謝した後、自分の今日あるはほとんど皆母の力であるから恐縮だが母をも一緒に招待して貰えないだろうかと申し出た。もちろんそれは快諾されて、当夜は母親と共にその晴の歓迎会に臨んだのであった。発起人を代表して坪谷郵便局長那須九市の歓迎の言葉があり、牧水も鄭重な謝辞を述べたが、出席者は坪谷の人たちを主に村内の有志、旧友たち三、四十名、村としてはまことに空前の催しであった。牧水の感慨もさることながら、共にその席に列した老母の感慨はどうであったろうか。会が終り発起人たちと共に家に帰ると、そこには鹿児島方面の弟子数名と村の文学好きの青年たちが待ち構えていてすぐにまた酒になったが、上機嫌の牧水は一同の望むがままに立ち上がって自作の「ふるさとの尾鈴の山のかなしさよ秋も霞のたなびきてをり」を朗詠しはじめたが「かなしさよ」まで朗々とやって来たとき、急にぴたりと声を呑んでしまい、一同がいかにせがんでも遂にその歌の続きをやらなかったという。思いがけね村人たちの歓迎会に臨みその席から帰ったばかりの牧水は恐らく十余年前その歌を作った当時のさまざまなことが憶い出されて万感こもごも胸に迫り、ひそかに涙を呑んだのであろう。

とにかくこの時の帰省はいわば故郷に錦を飾ったものであり、いま坪谷神社に残っている。

久し振りに故郷に帰り来れば朋友矢野伊作、富山豊吉の両君この板を持参して氏神に奉る歌書けといふすなはち氏子の一人若山牧水

うぶすなのわが氏神よとこしへに村のしずめとおはすこの神

という額や、裏面に「矢野寅吉おぢやんに贈る歌、おとなりのしげ坊」と記した。

おとなりの寅おぢやんに物申す　永く永く生きてお酒飲みませうよ

という愉快な短冊などの揮毫もこの時の滞在中で、まったくこれこそは牧水の一生一度の晴の帰郷だったといってよかろう。

四月十二日には父の十三回忌の法要を営んだ。そして老母を口説き落して沼津まで連れ出すことに成功し、四月十六日の朝、馬車で故郷を発ったが、老母は沼津滞在一か月ばかりでまた坪谷に帰った。

牧水はその後、短冊半折等の揮毫頒布会を各地に催して得た金で沼津千本松原の蔭に土地を買い家を建て以前からずっと主宰発行していた「創作」の他に詩歌総合雑誌「詩歌時代」を発行したが、その雑誌のため少なからぬ負債が出来、更にずっと揮毫頒布旅行を続けねばならなくなり、遂に北海道、朝鮮まで出かけた。牧水がその次に帰省したのは昭和二年の朝鮮旅行の帰途、大分、延岡での揮毫頒布会をすましてからで、七月二十五日に喜志子夫婦同伴で坪谷に帰ったのであったが、この時は非常に疲れきっていて半病人の有様、それでも父の墓参をしたり郷里の写真十数枚を撮らせたりなどして二十九日土々呂港を出帆したが、これが最後の帰省であり、翌三年九月十七日沼津千本松原の蔭の家で永眠し、同地浜道乗運寺の墓地に埋葬されたが、分骨して坪谷の母の墓にも埋葬されている。

追慕のおもい

若山喜志子

風の匂ひ草木の色もさながらに三とせの秋はめぐり来しかな

この一首は、いまを去る二十数年もの昔、故人の三回忌を迎えた日私の詠んだものであります。それから後もずっと毎年九月といふ月になると、この同じ思いを繰り返し、九月よ、ああ九月のあの日、あの時よ、日光はやはり今日のように明るく照っていた。風の動きも、草木の色もやはり今日見るこの色であり匂ひであった。それなのに……と思ふとそのたびに私の胸は冷たい刃物にえぐられるような生ま生ましい痛みに疼くのであります。そしていよいよ追慕のおもひは巾広く深まりまさるのみであります。

ですから私はいつの間にか九月という月の名を苦月とよぶようになってゆきました。実際私には九月といふ月は苦月なのであって、この月に入ると一そう何かしらの煩い事が出来て来て心弱い私はそれに苦しみ余分な煩を背負いながらいつも心重く忌を営んで来ていたように思われてなりません。それに大抵の事は自宅にいてではなく、どこか他所での営みに出かけて、そこで多くの人達と一緒にいながら、何かしらの心遣いをしながら営んで来たのであります。

昨年ははからずもその生地坪谷に盛大な牧水祭というのが催されましてそれにわざわざの御招きを受け、何年ぶりかの生家を訪わさせていただき、さながら故人の霊のさまよっているかの懐しい山川の姿に接し、また心厚い故里人の多くにお遇いし、終始一貫深い感激と感謝の念に浸らせられて、至極短い時間でありましたが、まことに充実した日を過ごさせていただきました。今でもそれを思い起こすと、あの周囲をとりまいていた自然の風光のさまざま、人の誰れ彼の面影がまざまざと身近に浮び出て来て心の温まるおもいがいたします。そして私はあらためてつくづく故人のしあわせを羨まずにはおれません。

私は今年の春以来ずっと健康を損ねていたため故郷の信濃の山の湯に来て静養につとめておりましたが、おかげで次第に快癒に向かい昨今では殆んど全快の状態に復しました。

それなのに尚私は此処が離れ難くて何時までも滞在を続けております。それは一つは此処の自然が私をしん底から愛しいたわって抱きとっていてくれるからでもありますが、それよりも尚大きな理由は、私自身止むに止まれぬ自己凝視の道場を此処に見い出したからのことであります。そしてその凝視の大半は故人へのそれへ必然的に深いつながりをもつものであって、それを知ってから私は自身の不健康を悲しむ思いも一層真剣になり、必死のおもいで摂生を怠らず、二か月三か月の時を経て来たのでありました。幸いにしてこのごろではその不安は去りましたが、そうすればなおのこと、この一人のこの対決的凝視を欲する欲求が無限に湧いて来て、この頃では他人の目にも何か異様に映るらしく、普通の静養だけの浴客ではない。という目で見られるようになって来ております。

私はこれまで永い年月の間――それは止むに止まれぬ一つの宿命的とも言える現実との厳しい闘いの障碍にさえぎられていて――故人に泌々と直面する余裕ある時を待ち得ずに過ぎて来たことの悔をこの頃になってはじめて胆に銘じて悔い得る時を与えられるようになって、その欣びに目もくらむ思いを体験しつゝあるのであります。けれどもそうしていながら時にはこの現在の自分を冷静に批判して見ては、かって悲痛の涙にくれながら詠んだ。

すがやかに往き過ぎまししはこの道か　辿りつついまだ辿り得なくに

の嘆きを繰り返さざるを得ず、そして常に自分の前方には永遠の彼方に向かって果しも知れず去って行く人の後姿を見つめながら、飽きることを知らず追いかけている自分を見い出すのであります。

このような事を書けば、それは際限もなく一つの繰り言になってゆくので、それは紙数にも制限のあるこの場合慎まねばなりませんので、こゝにはそれをいたしませんが兎に角私は、そんな風な生き方をこの頃になって始めていることをこの機に一筆書き記したのであります。　以上

昭和二十八年九月二日

信濃山中の佗しき湯宿にて記す。

（牧水顕彰会編「若山牧水の思い出」から）

牧水祭行事

一、歌碑祭
一〇、三〇〜一一、二〇歌碑前

二、記念講演会
一二、三〇〜一四、〇〇坪中体育館前

三、記念演奏会
一四、〇〇〜一五、〇〇坪中体育館

四、牧水ゆかりの人々の作品展
九、〇〇〜一六、〇〇坪中体育館

五、祝賀会
一五、〇〇〜一六、〇〇坪中体育館